

令和5年度第2回大野城心のふるさと館運営協議会 議事録

1 日時 令和6年2月14日(水) 13:30~15:10

2 会場 大野城心のふるさと館 M2階 講座学習室

3 出席者

《委員》

林田 スマ(大野城まどかぴあ)

伊藤 信二(九州国立博物館)

松川 博一(九州歴史資料館)

中村 弘峰(中村人形)

野口 厚(西日本鉄道株)

天野 祥子(ふるサポの会)

片山 一男(ふるサポの会)

※欠席委員 本田 麻子(株JTB福岡支店)、古賀 麻美(ままいる)

《事務局》(大野城心のふるさと館)

館長 赤司 善彦

ミュージアム担当 課長 山崎 克博、係長 早瀬 賢/島 朋宏、担当 永利 舞、花房 伸哉

文化財担当 課長 石木 秀啓、係長 林 潤也/上田 龍児

4 内容

(1) 館長あいさつ

(2) ウェブアンケート結果報告

事務局より、資料に基づき説明。

[委員意見]

(委員) ショップの人気の高いということは、すでに来館者の満足度が高い可能性もある。現状を維持していくのも大変だが、スタッフの意気込み、お客様に向かう姿勢がよいのだと思うので引き続き大切にしてほしい。

(委員) 子どもも楽しめる展覧会や講演会というとむずかしい。民間では、回答後にヒアリングをすることを前提としてアンケートをとることもある。ヒアリングにより掘り下げて聞いていくことで、この回答数がより生きてくるのではと思う。

(委員) 九州歴史資料館では「子ども歴史教室」などをやっているが、やはり展示と解説だけでは子どもたちの満足度が低いので必ず体験を絡めている。とにかく博物館は楽しいところだと体験してもらうのが一番だと感じる。

(委員) 1階のワークショップでやっている折り紙などが好評を得ている。折り紙の博物館など、折り紙にスポットを当ててみても面白いかもしれない。

(委員) 展示品との兼ね合いがあるので、展示室内の照明を明るくすることはできないと思うが、展

示室が暗いと怖がる子どももいる。今の企画展でもゴキブリの展示などは子どもたちが楽しそうにみているので、子どもが楽しめるポイントをつくるとよいのではないかと。

(委員) ショップとカフェの利用割合はどれくらいか。

(事務局) だいたい半々くらいかと思う。

(委員) 特別展を完全に子ども向けに振り切るのは難しいと思う。ワークショップなど展示の中どこか1つ子どもが楽しめるポイントを設けるのはどうか。たとえば何かができる工程を追いかけるような子どもに分かりやすく、保護者も一緒に楽しめるような、親子で参加してもらえる取組をやっている館もある。例として、周年事業で毎月キッズデーを設定し、スタッフはかなり大変だったようだが、アンケートなどでは大変な好評を得ていたという事例がある。

(委員) 子どもたちが学校の授業などで心のふるさと館に来て、家族を誘ってまた来てくれるという流れができています。昨年の「MINIATURE LIFE 展」はまさにそのきっかけとなっていた。これからは様々な世代が集える仕組みを継続してほしい。「子ども」といっても未就学児から中高生まで幅広い。ふとしたことをきっかけに子どもたちの夢が広がっていくこともあるため、そのきっかけを与える場所であってほしい。

(委員) 子ども向けでいうと、昆虫、動物など科学博物展示は人気がある。九州の生き物であったり、写真展だったり、昆虫博物学だったり、様々な切り口がある。また、重機なども子どもは好きだと思う。特殊車両を製造している会社と共催した展示や講演会なども実施できるかもしれない。他にも、スポーツやブロック、ホームセンターで開催されている工具を使ったワークショップ、発掘体験なども人気がある。集客でいうと、プロジェクションマッピング、プログラミング、マイクラフトなどは興味がある子どもは多いと思う。

最近、SNS で東京大学の一般入試を減らしてAO入試と推薦を増やすという話があり、それまでの経験を問う試験では富裕層優遇になってしまうという話が流れていた。心のふるさと館は、比較的安い金額で様々な経験を積むことができる施設という社会での役割を担っていくことも大切かと感じる。

(3) 大野城心のふるさと館の運営に関する事項

事務局より資料に基づき説明。

[委員意見・質疑]

(委員) 特別展・企画展を年4回開催するというのはとても大変なことである。九州国立博物館では職員を集めて、特別展のアイデア出しをしている。

(委員) 心のふるさと館では、竹田家文庫を収蔵後、さっそく年末に展示されていた。展示企画にも季節感を感じる。収蔵品の活用を今後行ってほしいが、展示品としてだけではなく、研究資料としても今後活用して行ってほしい。

(委員) 竹田家文庫については修猷館高校とのタイアップも検討してみてはどうか。また、竹田家文庫という名称だけでは市民にアピールできない。牛頸で笛塾を開いていたなどの市との関係性をもっとみせていくとみんな興味を持つのではないかと。

(委員) 竹田家文庫とあわせて目加田文庫も今後どんどん活用して行ってほしい。

(委員) にぎわいづくり事業やつながる事業は館を使って実施しているのか。

(事務局) 基本的には館を使って実施している。

(委員) 今年度に開催した特別展「白木原ベースサイドストーリー」や「MINIATURE LIFE 展」など例外はあるが、通常の展示は発掘をベースにした土器などの器ものが多い印象。興味がある人は来てくれるが、今まで興味がなかった人を引き付けるために、何かと組み合わせるなどの工夫が必要かもしれない。

国宝の展示を年1回という話があったが、国宝自体、数が無数にあるものではなく、10年くらい経つとテーマの設定に苦慮すると思う。国宝だけでなく人間国宝にフォーカスする、国宝と人間国宝を組み合わせるなども考えてもよいと思う。九州は陶芸大国でもあり、人間国宝の方も多し。また、博多織の次代育成のためのデベロップメントカレッジでも、学生の発表の場を作っていないかならなければならないといった課題もあり、そういったところとも協力して何かできるのではないかと考える。

(4) その他

(委員) 開館時間が9時から19時まででは長い。九州国立博物館では、開館時間は9時半から17時半までで、特別展開催期間のみナイトミュージアムとして金曜・土曜の閉館時間を20時としている。長時間の開館は光熱費や人件費などの経費増大の問題もあると思う。

(委員) 太宰府市の文化ふれあい館は開館当初、夜間開館をしていたが、光熱費、人件費などの経費と入館者状況を鑑みて、17時閉館に変更した経緯がある。九州歴史資料館では、ミュージアムナイトや夜間講座などイベントとして開館したときはかえって特別感があり、普段は来ない方たちも来ていた。遅くまで開館している日を絞って効果を上げる方法もある。

(委員) 心のふるさと館が開館した時の当初の流れを見ていると、費用対効果を考えることは大切である。

(委員) 心のふるさと館では、夕方17時を過ぎるとあまり来館者を見ない。

(委員) アンケートを見ていると、子連れの方が多い。利用者の実態に合わせて開館時間を検討するのがいいと思う。

(委員) カフェが博物館に普段来ない人たちのきっかけとなる可能性はある。この近辺は人口も増えており、今後おしゃれになってくる可能性のある場所かと思う。今後、カフェの民間委託などがあれば遅い時間にカフェにくるお客さんを後日にでも特別展などに呼び込める可能性はある。

(委員) 数のデータをとって、結果によって閉館時間を検討してはどうか。

(委員) プレミアムフライデーなどのように、プレミア感を出すと効果的かもしれない。

(事務局) 今回いただいた意見を今後運営に反映させていきたい

→次回は令和6年8月27日(火)午前中の開催とする。

5 配布資料

- ・次第
- ・ウェブアンケート結果一覧
- ・令和5年度特別展・企画展実施報告、令和6年度特別展・企画展予定

- 年報 2022
- ここふるニュース vol.18
- チラシ「南の縄文文化」「水城 DAY」